

# 奈良のむかしばなし

第79話

## 川舟に隠れた皇子 文と絵・山崎しげ子

姿の大海人皇子がおられた。

実は、この皇子の役は、子方の少年が演じている。その可憐さに客席の緊張感にはわかに和む。

聞けば、皇子は二、三日、食事をさされていなくてか。夫婦は根柢と国栖魚(鮎)の焼物を差し上げた。

皇子は二人を勞い、鮎の片身を翁に与えた。それを翁が吉凶を占うため吉野川に放つと、不思議や、鮎は生き返り、泳ぎ去った。皇子が天皇になる瑞兆だった。

さて、舞台は一転、クライマックスへ。弓矢を持った敵方の追っ手が登場する。翁は皇子を急ぎ、伏せた川舟の中に隠した。(イラスト参照)そして気迫の応戦で追っ手を追い払う。この場面は痛快。

舟から救い出された皇子。少しぐったりしている。客席は、幼い子方が暗い舟の中で耐えていた健気さにグッと胸を熱くする。皇子は、「都に帰った時は、この恩に報いよう」と申され、老夫婦は感涙。続いて、舞台はにわかには華やぐ。

天女が舞い、蔵王権現が出現、来るべき天皇の御代を寿ぎ終演となる。

大海人皇子は吉野で挙兵、大友皇子軍との激戦(壬申の乱)に勝利し、天武天皇として飛鳥浄御原宮で即位した。英明な天皇の、日本の新しい国造りはここから始まる。今年はその壬申の乱(672年)から1350年の年でもある。



## 国栖奏 (奈良県指定無形民俗文化財)

旧暦の1月14日に浄見原神社で奉奏されている国栖奏。その歴史は古く、288年、応神天皇が吉野に行幸された時に、国栖人が歌舞を奏したのが始まりとされる。672年にも大友皇子の追っ手から大海人皇子を助け、腹赤の魚(ウグイ)、醴酒(二夜酒)、毛瀾(アカカエル)などを献上し、国栖舞を奏した。天武天皇は即位後、国栖舞を「翁の舞」と名付け、大嘗祭などで奉奏することを定めた。その後、平安末期の争乱で奉奏ができなくなると、国栖人は天武天皇をご祭神とする浄見原神社を造営し、今日まで絶えず国栖奏を奉奏している。



写真提供：吉野町

### 物語の場所を訪れよう

浄見原神社 (吉野町南国栖)  
近鉄大和上市駅より東へ約7km



☎吉野町産業観光課 ☎0746-32-3081